



玉手山7号墳の発掘調査

2001・2002年度の調査概要

大阪市立大学日本史研究室
柏原市教育委員会

2003



◆はじめに◆

玉手山古墳群は、大和川と石川にはさまれる丘陵上にさしかれた、古墳時代前期(3世紀後半から4世紀)の古墳群です(右頁)。河内から大和に入る重要な交通路をにらむ位置にあることや、推定13基という多くの前方後円墳を含むことから、河内地域の有力豪族の墳墓地と考えられています。この古墳群については、古くから調査が進められ、かなりのデータが蓄積されています(右表)。しかし、戦後の開墾や1960年代の宅地開発などで半数が消滅し、また大規模古墳についての情報が少ないため、全体像はいまだはつきりしていません。とくに、最大とみられてきた7号墳については、ほとんど何もわかつていませんでした。

そこで、平成12年度から3カ年にわたって、7号墳の測量調査(12年度)と発掘調査(13・14年度)を実施いたしました。その結果、墳丘の規模や構造、埴輪や葺石、埋葬施設の概要など、多くの成果をえることができました。今後、さらに玉手山古墳群の調査研究を進めるとともに、現存する古墳の保護をはかり、柏原の歴史を体感できる文化財として活用していくきたいと考えています。調査にあたりまして、あたたかいご協力をいただいた安福寺をはじめ地域の方々や、ご教示いただいたみなさま方に、謝意を表します。

平尾山古墳群



1/20,000

古墳名	別称	墳形	全長	葺石	埴輪ほか	埋葬施設	副葬品	現状	調査年
1号墳	小松山古墳	前方後円墳	110m	○	円筒・楕円筒	後円部	竪穴式石室	不明	1959
						前方部	粘土塚	不明	1971
2号墳		前方後円墳	70m	不明	円筒	後円部	竪穴式石室か 石棺	不明	1987
3号墳	勝負山古墳	前方後円墳	96m	○	円筒・朝顔	後円部	竪穴式石室 粘土塚か	鉄製品か・盾か 不明	共同墓地 1991
4号墳		前方後円墳	60m	不明	不明	後円部	粘土塚	石製筋柱車・勾玉・管玉・銅鏡	一部相撲 1980
5号墳	鏡湖古墳	前方後円墳	75m	○	円筒	後円部(東)	竪穴式石室 粘土塚	鏡形石・管玉・鏡面・巴形銅器・鐵鏡・鐵製工具 石製筋車・鉄刀・鐵劍・鐵製工具	調査後消滅 1988
6号墳	すべり台古墳	前方後円墳	70m	○	不明	後円部(東)	竪穴式石室 竪穴式石室	内行花文鏡・勾玉・管玉・銅鏡・鐵刀・鐵斧・鉄矛・土師器壺 内行花文鏡・勾玉・管玉・銅鏡・鐵鏡・鐵刀・鉄矛・土師器壺 鐵鏡・鐵刀・鐵矛・土師器壺	1959 調査後消滅
7号墳	後山古墳	前方後円墳	110m	○	円筒・朝顔・家・土師器壺	後円部(東) (南)	竪穴式石室か 粘土塚	石製合子・石費用 不明	2001
8号墳	東山古墳	前方後円墳	80m	○	円筒・楕円筒・朝顔・家	後円部	粘土塚か	鐵劍	填丘崩落 1986
9号墳	クサダ谷古墳	前方後円墳	65m	○	円筒・朝顔・土師器壺	後円部	竪穴式石室	琴形石製品・勾玉・ガラス小玉・鐵劍・鐵斧・土師器	半壊 1982
10号墳	北玉山古墳	前方後円墳	51m	○	円筒・楕円筒・朝顔・形象	後円部	竪穴式石室 前方部	勾玉・管玉・銅鏡・鐵鏡・鐵鏡・鉄刀・鉄矛・鐵鍊 土行花文鏡・鐵鏡・鐵刀・鐵斧	調査後消滅 1952 1966
11号墳		前方後円墳?	不明	不明	不明	後円部	粘土塚	不明	消滅
12号墳	駒ヶ谷北古墳	前方後円墳	55m	不明	円筒	後円部	粘土塚	方面規範鏡・鉄刀・鐵槍・鐵鏡・鐵鍊ほか	消滅 1964
13号墳	孤塚古墳	前方後円墳	92m	○	円筒・二口壺壺	後円部	竪穴式石室	琴形石製品・勾玉・管玉・ガラス小玉	消滅 1964
14号墳	羽衣宮山古墳	前方後円墳	65m	○	円筒	後円部(北) 前方部(北)	竪穴式石室 粘土塚	石鏡・有孔禮器品・勾玉・管玉・ガラス小玉・鐵劍 内行花文鏡・鐵鏡・鐵刀・鐵斧	調査後消滅 1962
15号墳	西山古墳	円墳	不明	不明	不明	後円部	竪穴式石室	四獸鏡・鐵劍・鐵製品片	消滅 1928
16号墳	伯太蕃神社古墳	前方後円墳	不明	不明	不明	後円部	不明	不明	不明

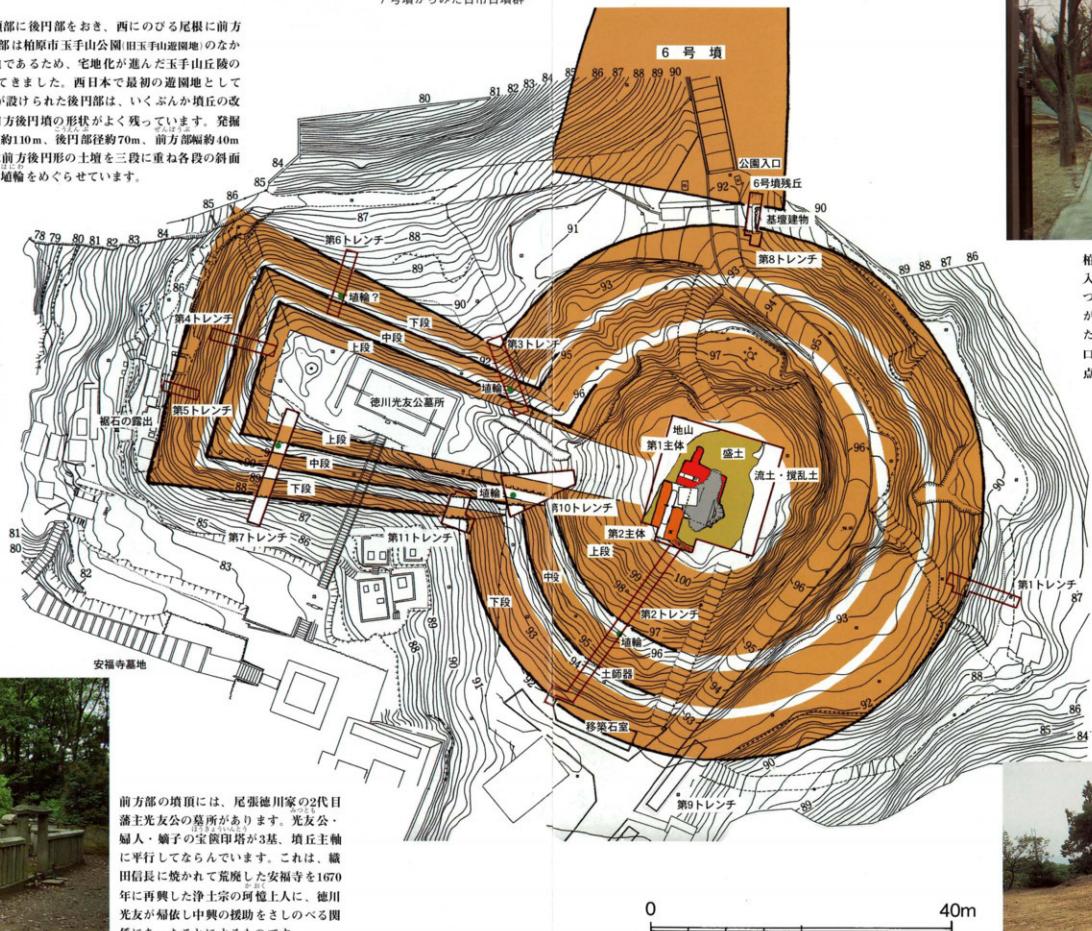


◆ 7号墳は全長110mの前方後円墳◆

◆ 墳丘の現状と概要◆

玉手山7号墳は、標高101mの丘陵頂部に後円部をおき、西にのびる尾根に前方部をかけて築造されています。後円部は柏原市玉手山公園(旧玉手山遊園地)のなかに位置し、前方部は安福寺の境内地であるため、宅地化が進んだ玉手山丘陵のなかで、今日までいわい残されてきました。西日本で最初の遊園地として1908年(明治41年)に開園したのち、道具が設けられた後円部は、いくぶんか墳丘の変更を受けていますが、全体として前方後円墳の形状がよく残っています。発掘調査の結果、図示したように、全長約110m、後円部径約70m、前方部幅約40mであることがわかりました。墳丘は前方後円形の土壇を三段に重ね各段の斜面には葺石をふき、テラス(平坦面)には埴輪をめぐらせています。

7号墳からみた古市古墳群



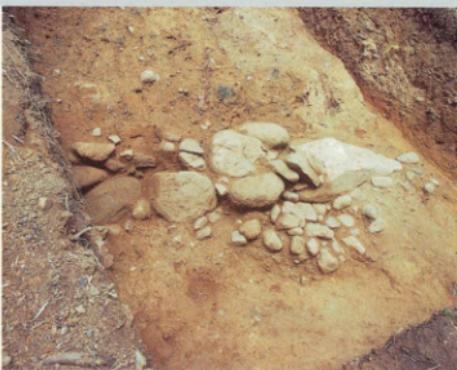
柏原市玉手山公園の北側の入口(東門)を入ると、正面が7号墳の後円部です。かつては、7号墳の北側には6号墳と5号墳がありました。が、1950年に発掘調査された後、宅地開発で失われました。この人口ふきは、6号墳の前方部があった地點です。



後円部の墳頂は、樹木のない空間が広がっており、1基の宝印塔がたっています。これは、玉手山丘陵が激戦地のひとつとなった大坂夏の陣の、戦没者を供養するもので、17世紀の建立と伝えられています。地表には、埋葬施設にかかる板石や礫が数多く散乱しており、1974年と1980年には副葬品であった、石製の盒子の蓋と身が採集されていることからも、埋葬施設は既に手が入っている予想されました。



後円墳の北・東・南の3箇所で墳端が明らかになり、くびれ部の調査成果もふまえて、後円部の直径が約70mであることがわかりました。墳頂までの高さは10~11.5mです。山を削り形をととのえ、3段の土壇を作りあげ、墳丘斜面には石を葺き上げています。



◆第8トレンチ◆ [後円部北側]

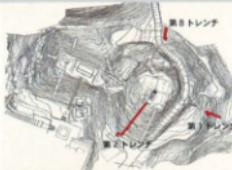
7号墳の墳丘規模を確かめるために、後円部の東側、墳丘主軸に沿った位置を発掘しました。後円部の東側は舗装道路が通るなど、墳丘斜面は大きく削られてもとの姿を失っていますが、墳端の基底石が残っており、後円部の東端がわかりました。これによって、前方部の先端からの長さを計測することにより、墳丘の長さが約110mであることが明らかになりました。

◆第8トレンチ◆ [後円部北側]

後円部の北側の、玉手山公園入口の脇を発掘すると、墳端の基底石があり、また石敷が墳端から外へ約2mわたってほどこされていました。また、宅地開発で削平された6号墳の前方部が、公園内に残存していることが確認できました。葺石は転落していますが、前方部前面の墳丘斜面が残っています。なお、7号墳と6号墳の間から、古代の建物の基壇が見つかりました。



◆後円部の発掘調査◆



中段据テラスの土器出土状況。口が下になっています。写真下部は基底石。

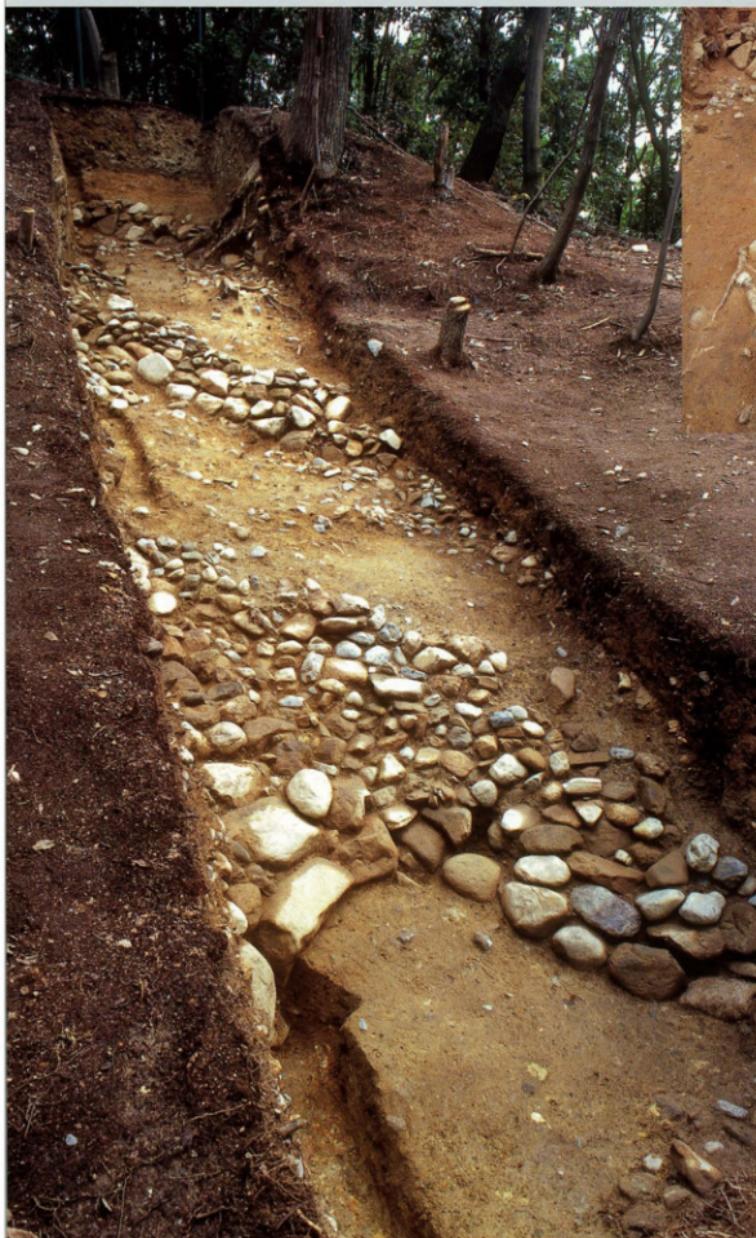


◆第2トレンチ◆ [後円部南斜面]

後円部南側で、後円部の据から頂上までを確かめる調査を行いました。手前の鐵柵の横に見える大きな石が墳端の基底石です。ここから墳頂までは、高さ11.5mあります。斜面の途中にある2カ所の石群は、それぞれ中段と上段の裾部およびテラスにあたり、後円部が3段に土壇を重ねた三段築成であることがわかりました。墳丘斜面の葺石は、長い年月の間にほとんどが転落してしまい、いまは据部の部分のみが残るだけですが、もとは墳丘全体が葺石に覆われて白く輝いていたことでしょう。また、テラス部分についても石敷としています。上段据のテラスから圓筒埴輪が、中段テラスから土器(直口壺)が見つかりました。墳丘はほとんどが地山を形成してつくられており、盛土は墳頂部の厚さ1mほどです。



後円部と前方部の境である「くびれ部」を南北両側で確認しました。前方部側面の中段と上段では、基底石が後円部にむかって高くなり、2面のテラスはスロープとなっています。西にのびる尾根を利用した前方部は低い位置にあり、くびれ部でテラスを傾斜させ後円部に取り付けています。



上段据のテラス面には円筒埴輪の根本がテラスに据えられた状態で残っていました。直径40cmの大型の埴輪です。

◆第3トレーニング◆

【北くびれ部と前方部側面】

後円部と前方部の折れ曲がり部分である「くびれ部」にあたります。また、その上では、前方部側面の中段と上段の葺石が見つかり、前方部についても三段築成であることがわかりました。また、注目できるのは、この中段と上段の葺石と、それぞれの間にあるテラスが、後円部(左側)にむかって高くなっていることです。これによって、低い前方部から高い後円部へと、テラスを上り勾配のスロープとしていることが推測できました。

◆くびれ部の発掘調査◆



◆第10トレンチ◆

〔南くびれ部上段・中段〕

中段のくびれ部、前方部の上段側面を確認しました。両段とも大きな板石を基底石として据え、小振りの丸石を葺石、テラスの石敷に使ってています。上段の基底石が後円部(右側)にむかって高くなっています。テラスがスロープをなしていることがわかります。テラスには円筒埴輪が1本しかなく(左側)、埴輪の間隔はかなり広かったようです。



◆第11トレンチ◆

〔南くびれ部中段・下段〕

下段(墳端)のくびれ部、前方部の中段側面を確認しました。下段には、たいへん大きな板石をななめに据えて基底石としています。墳端外には、やはり石敷がほどこされています。基底石は後円部では1段、前方部では2段になっていて、これに対応して、石敷も後円部側が一段高く平坦面をなし、前方部側では下り斜面になっています。

西にのびる前方部について、南北の両側面と西側の前面を調査し、3段に築成された状況を確かめることができました。西にのびる尾根を利用しているため、前方部の裾は水平ではなく、もとの地形にしたがって下っており、くびれ部から前面にむかって約4.5m低くなっています。



◆第4・5トレンチ◆ [前方部前面]

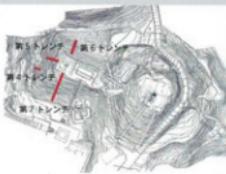
前方部前面はかなり急な斜面となっていますが、上段・中段の裾部を第4トレンチで(写真右)、下段の裾部(壇端)を第5トレンチで確かめることができました(写真右下)。墓地の崖面に露出している壇端の基底石は、第5トレンチのすぐ南側(右側)の位置になります。前方部前面の斜面は高さが約8mありますが、上段(写真上)と中段がそれぞれ2m前後であるのに対し、下段は4m近くあって、均等に3段になっているわけではありません。



◆第6トレンチ◆ [前方部北側面]

前方部北側面(写真上)では、中段裾の基底石とテラスの石敷が残っていましたが、下段斜面の葺石はすべて転落してしまいました。

◆前方部の発掘調査◆



◆第7トレンチ◆

【前方部南側面】

前方部南側面では、3段の段築掘據がすべて残っており、葺石やテラスの石敷の様子がよくわかりました。写真右側が後内部側、左側が前方部の先端側です。上段据のテラスで円筒埴輪を確認しています。墳端外の石敷もかなり良好に残っています。これで、南北両くびれ部、および前方部北側面と前面の成果をあわせ、前方部の形と規模をほぼ正確に復元できます。



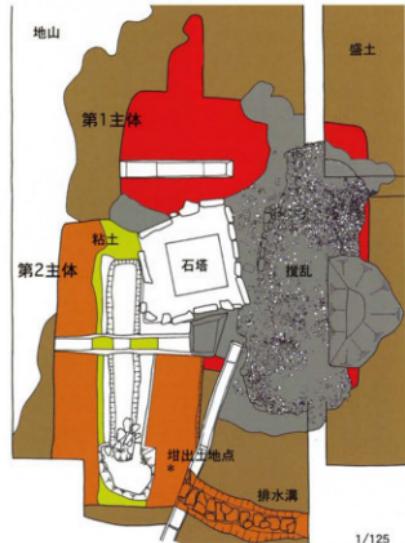
墳端の基底石には大きな板石を使っています(写真左)。南北くびれ部でも同様な板石が用いられており、南側の基底石の方が北側よりも大きく目立っています。なお、弥生時代後期の土器が出土しており、前方部の尾根筋に集落があったようです。

埋葬施設の所在を確かめるため、後円部の墳頂に15m×15mの調査区を設け、平面調査により墓坑の検出を試みました。中心主体である第1主体と、その西南に追加埋葬された第2主体があり、第1主体は東半部が既に掘削されていること、第2主体は粘土構であることがわかりました。



◆第1主体◆

墓坑は、南北約7m×東西約6~6.5mの、正方形に近い形です。東半分には多量の礫がありますが、これは江戸時代に大がかりに掘り返された擾乱の結果のようです。あるいは、埋葬部分は墓坑の東寄りにあったのかもしれません。擾乱がおよんでもない西北部について地表下1.6mまで掘り下げましたが、粘土や石材は認められませんでした。どうも豊穴式石室ではないようです。正方形に近い墓坑の平面形も、通常の長大な豊穴式石室や粘土構では理解しにくい点です。大型前方後円墳である7号墳の中心主体が木棺直葬とは考えにくく、石材を直葬していたのかもしれません。



1/125

墓坑の北辺西側に張り出しがあり(写真左中)、墓道かもしれません。擾乱は深さ1mにおよび(写真左下)、埋葬施設に由来する多量の礫、近世の陶磁器を含んでいます。板石はわずかでした。

◆埋葬施設の発掘調査◆

◆第2主体◆

第1主体の埋葬後、やや西南に位置をずらしてつくられた粘土塚です。墓坑は、南北長7.4mで幅3.8mあり、東南隅には、蹠を詰めて上に板石をかぶせた排水溝をもうけています(写真下右)。粘土塚は、全体を露呈させていないのでイメージしにくいのですが、多量の粘土をもちいて木棺を覆い、巨大なカマボコ形に整えたものです。粘土は、南北両側では墓坑の端まで続いています。部分的に掘り下げたところで(写真下左)、粘土は幅1.6m、厚さ50cmあり、さらに下へ続いています。粘土の山が左右二山になっていますが、これは、もとはカマボコ形をしたひとつづきの粘土であったものが、中の木棺が腐ったため、棺の上にあった粘土が陥没したもので。蹠が帶状に詰まっている部分が、粘土が落ち込んだ範囲にあたります。地表面に露出していたこの蹠群は、後世に陥没部分を掘り込んで蹠を入れたものと考えていますが、性格はわかりません。



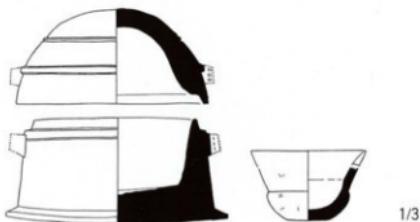
◆出土遺物◆

かつて墳頂から石製の容器（盒子）が採集されていましたが、発掘調査で新たに石製の小壇（増）が見つかりました。また、円筒埴輪と朝顔埴輪、家形埴輪の破片、そして土器が出土しています。

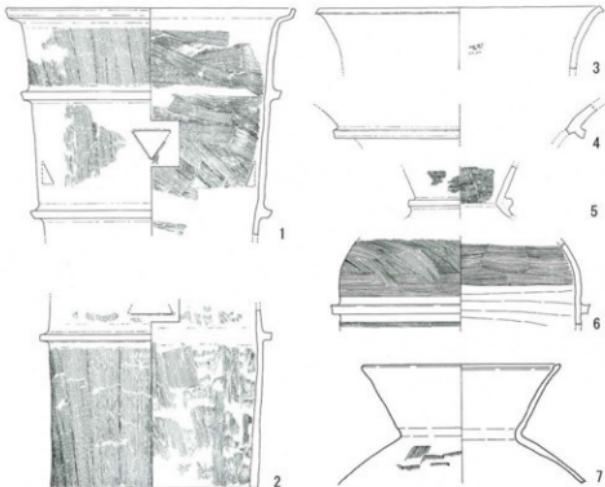
◆副葬品—盒子と増—◆

7号墳の副葬品としては、滑石製の盒子（上）と増（下）がわかっています。盒子は、1974年に蓋が、1980年に身が採集されたものです。増は、第1主体から南に続いていた擾乱土から出土しました。第2主体は荒らされていないので、2点の石製品はともに第1主体のものと考えられます。かつて埋葬施設が掘られた際に、かき出されたものでしょう。盒子は楕円形で、底部で約14cm×約11cm、高さは約12cmほどです。増は底部から頸部の破片で、口径約7cm、高さ4~5cmほどの大きさです。こうした滑石製品の器物は、古墳時代前期後半以降にあらわれるもので、7号墳の年代を考える上で重要な手がかりになります。

※盒子は、蓋を個人が、身を関西大学が保管しています。写真は、白神典之氏（堺市立埋蔵文化財センター）に提供いただきました。図は、白神典之「玉手山7号墳探査の石製盒子」（『史原』56、1981）から転載。



1/3



円筒埴輪（1~3） 朝顔形埴輪（4~6） 土師器（7） 1~6:1/8 7:1/4

※6は、河内一浩「玉手山古墳群の埴輪」（『玉手山古墳群の研究』埴輪編、2001）から転載。

◆埴輪と土器◆

埴輪はほとんどが円筒埴輪（1~3）で、これに朝顔形埴輪（4~6）が加わります。形象埴輪としては家形埴輪が数片あるのみです。円筒埴輪は、底部径が40cmほど（2）の大型品です。口縁部はゆるやかに外反するものが多く（3）、端部を外に折るもの、受口状を呈するもの（4）もあります。透孔は三角形と逆三角形で、一段に5つか6つあけています。まだ窯による焼成以前の野焼き段階のものです。外側は赤く塗っていたようで、赤色顔料がよく残っているものもあります。土師器としては、墳頂から二重口縁壺、後円部のテラスから直口壺（7）が出土しています。やはり古墳時代前期後半に位置づけられるものです（布留式）。

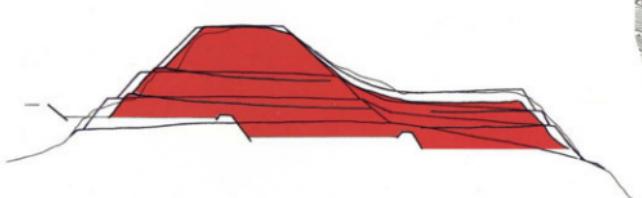
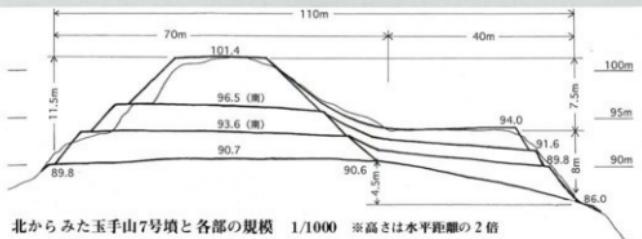
1: 第6トレンチ 2: 第3トレンチ

3: 第10トレンチ 4: 第3トレンチ

5: 第2トレンチ 6: 採集品

7: 第2トレンチ

◆発掘調査でわかったこと◆



柳本行燈山古墳との比較 行燈山(赤) 1/3000 玉手山7(黒) 1/1316 (行燈山の4/9規模)



最後に、2ヵ年にわたって実施した7号墳の発掘調査の成果についてまとめておきます。

1. 墳丘の規模・形態・構造がほぼ明らかになり、正確に墳丘を復元することができました。墳丘規模は、全長約110m、後円部直径約70m、前方部の長さ40m、前方部の幅40m前後です。墳丘の築成は地山成形が基本で、後円部・前方部ともに3段に築成されています。
2. 丘陵頂部にある後円部に対して、西に派生する尾根を利用して前方部は低く、前方部の側縁は先端にむかって下降しています。このため、くびれ部付近でテラスをスロープ状として、後円部と前方部のテラスを接続していることがわかりました。
3. こうして復元した墳丘の形状は、後円部に対して前方部がかなり短いもので、柳本行燈山古墳（奈良県天理市にある伝崇神天皇陵）と相似形をなし、同一設計とみられます。
4. 後円部において二つの埋葬施設があり、第1主体は不明な点もありますが、第2主体については粘土椁であることがわかりました。副葬品として新たに石製壙がえられました。
5. 墓輪・土器の資料がえられ、その特徴をつかむことができました。

以上のように、これまで内容が不明であった7号墳について、基本的なデータをえることができました。7号墳の年代は、古墳時代前期後半、前期末までは下らない時期と考えられます。実年代でいえば、4世紀中頃というところでしょうか。7号墳の位置づけが明らかになったことで、玉手山古墳群が、前期前半の9号墳や3号墳(110m)にはじまり、1号墳(95m)、そして後続して7号墳が築かれ、大型墳としてはこれが最後となり、このあと規模を縮小して前期のうちに形成を終えるという流れがはっきりしてきました。こうした推移から、玉手山古墳群は、奈良盆地東南部のオオヤマト古墳群に大王墓が築かれた時に、王権とつよく結びつき繁栄し、前期末に奈良盆地北辺に佐紀古墳群が形成される墳には衰退が始まり、玉手山丘陵の西側に古市古墳群があらわれる中期には、断絶したと考えができるかもしれません。

今後、玉手山古墳群についてさらに詳しく検討し、古墳群の全体像を正確に解明するとともに、大王墓との比較を進めることで、奈良盆地に基盤をおく倭王権が生まれ、各地の豪族が王権に結びついていく古墳時代前期における、河内・玉手山古墳群の意義を明らかにしたいと思います。



報告書抄録

ふりがな	たまたやまなごうふんのはっくつちょうさ						
書名	玉手山7号墳の発掘調査						
シリーズ名・番号	柏原市文化財概報 2002-II						
編著者名	大阪市立大学文学研究科日本史研究室 / 大阪市住吉区杉本3-3-138						
発行機関	柏原市教育委員会 / 柏原市安堂町1-43						
発行年月日	平成15(2003)年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
玉手山7号墳	たまたちょうう 玉手町	27221	34°33'31"	135°38'00"	20010803 20020906	439	範囲確認
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
玉手山7号墳	古墳	古墳	葺石・石散・理葬施設墓坑	石製小壇・埴輪・土師器			